

物語理解のための万物理論の可能性

新 田 義 彦

I はじめに

本論文で言う物語は、文芸作品や昔語りのような狭義の概念ではなく、人間の知的産物全般を意味する概念とする。つまり人間あるいは組織が、他の人に理解してもらうことを意図して発信する知的産物、あるいは知的行為全般を「物語」と呼ぶことにしたい。物語は何らかのメッセージの伝達、何らかの主張の表現である。

このような知的・文化的産物全般を物語という語で、ひとくくりにして扱う根底には、すでにおびただしい研究的知見の蓄積のある物語理論 (narratology) の手法や概念 (cf. 文献 [1] ~ [8], [10]) を適宜援用したいという目論見が隠れている。

我々が長い人生過程で体験し獲得 (習得) する、物語の全体を究極的に総括できる万物理論 (万能モデル) について、考えてみたいというのが本論文の目的である。きわめて雑駁な大風呂敷を広げて研究の動機を語っていることは自覚している。しかしながら、諸々の物語習得の極限に位置する観念、つまり人生行路の行く末の「諦観」について、情報学、物語理論、そして文学理論の方法論で接近するには、やはり何らかの「万物理論」の構築が不可避と言えないだろうか。

II 万物理論とは

バローの著述の翻訳書 [J. D. バロー原著, 林一 翻訳 (1999)] の背表紙の解説文の一部を引用して、物理学におけるこの概念の定義に代える。すなわち「あらゆる自然法則を包み込む単一の描像, すなわち, 物理的世界にかつてあり, 現にあり, これから現れるであろうすべての事物の必然性を完全無欠な論理によって導く《万物の理論》: 引用終わり」

万物理論に接近した理論としては、まずアインシュタインの一般相対性理論を挙げなければならないだろう。バローの著述でもかなりのページを割いて解説している。しかし万物理論のゴールには到達できなかった。優秀な物理学者による追究は続行しており、バローによればその発見は間近いとされている。

万物理論の同義語として「究極理論 (Final Theory)」という術語が使われることもある [28]。

数学の世界に限定すれば、万物理論に最接近した理論 (原理的思想) として、集合論、論理学、公理

主義を揚げることができよう。すべての数学概念、有意義な定理は公理系を出発点として、論理により証明（構成）される、という考え方であるが、ゲーデルによる「不完全性定理」の発見により夢は破れた。

すべての数学的概念を、射（morphism）と対象（object）の集まり（圏）として捉える圏論（Category Theory）[cf. [19] ~ [22]] が、まだ存命中の万物理論のように、筆者は感じている。

以上は物理学と数学基礎論の分野における、普遍性を持つ原理的思想の表層的素描であるが、万物理論の容貌と魅力を語る一助にはなったかもしれない。

さて本論文で追究を試みる「物語理解のための万物理論」は、勿論、物理学や数学のように厳密な定式化の体裁を纏うことはできない。

もう一つだけ予備的検討をする必要がある。人類学、社会学、心理学、歴史学、哲学、などの学問を総合して人間に関する知見を総合的に把握しようとする「人間科学」（cf. 文献 [23] S.シュトラッサー（著）徳永恂、加藤精司（訳）、『人間科学の理念』）について）を検討する必要があるかもしれない。

“人間についての経験科学という認識論的・存在論的構造についての基礎的省察（ibid. p383 訳者あとがきから）”を行う学問であるからである。本論文のような短編では膨大広範な人間科学の全容について検討することはできないが、哲学の立場から人間科学を深く検討しているシュトラッサーの著述『人間科学の理念』は、ある意味で人間の知的行動全般の万物理論を検討していると見なせるのではないだろうか。

シュトラッサーの言葉「われわれは科学によって人間を説明することができるとは信じない。むしろわれわれは人間から出発して、科学をよりよく理解できるようにすることを望むのである（ibid. p388 訳者あとがきから）」は、物語理解の研究者が、肝に銘ずべき文言のように思われる。万物理論は、自律的に作動して高い立場から人間の知的所産（つまり物語）を生成的に説明するのではなく、物語の製作者あるいは体験者である個々の人間の方から万物理論に接近すべきなのだ、と筆者は思う。この考え方はシュトラッサーの発言と同期する。

まずは、この万物理論に求められる要件、つまり必要条件を列挙し、この必要条件を満足できる理論あるいは表現形式に接近してみることにする。

Ⅲ 物語理解理論に求められること

物語理解の要件をまずランダムに列挙してみよう。

1) 人生に関する問題の解答・指針が与えられること。

人生の意味、目的、仕事、結婚、家庭、友人、親子、などの関係の理解、人生の終末と相続、伝承

など。（注：相続は経済的なものに限らず有形無形の知的財産全般を意味する）

2) 宗教、哲学的問題の疑問に答えられること。

世界と自分の存在の確認。自分がこの世に存在する意味。存在の証明の可能性。時間的持続。始めと終わりがあるのか。万能の神は存在するのか。神の存在証明はできるのか。個人の幸福と人類全体の幸福は両立するか。

3) 政治・経済問題の解答指針が与えられること。

世界全体の人々が同時に裕福（注：経済的に困窮していない状態）な生活を享受できるのか。戦争は何故起きるか。その回避方策。核兵器根絶の可能性。

4) 物理的・数学的問題の解答指針が与えられること。

宇宙の誕生と消滅を説明できる理論は作れるか。時間の存在と存続。空間のねじれの説明。種々の未解決問題の解答。

いささか大きすぎる要件の列挙となった。ここで強調せねばならぬことは、物語理解の万物理論は、根源的に局所性あるいは個人依存性を持つことである。この万物理論は、個々人の認識と理解の世界に根源的に束縛・限定される。個々人ごとに異なる万物理論が存在するのである。政治経済に関心のない人にとっては、上記3)の要件は不要となる。

各人の知的関心の広がりや深さに応じて万物理論（物語理解モデル）は、形と大きさ、密度を変容させる。

筆者自身の卑近な説明要件（説明願望）の一部を示すと下記のようなになる。

- ・政治家の倫理感高揚策（井戸堀は、今は昔の矜持なり）
- ・大企業の倫理感高揚と信頼性向上策
- ・日本が太平洋戦争に突入しそして敗戦を迎えた状況（不可避であったのか回避する転機があったのか）
- ・地球環境は温暖化しているのか／寒冷化（氷河期）に向かっているのか
- ・現在読み進めている難解な哲学書の内容の全体図式（論理的構造）
- ・現在輪講している難解な数学書の主要定理の直観的意味と効用（特に言語理論との関係）
- ・先祖が子孫（つまり我）に託した思い
- ・人生の締めくくりの断片文（辞世の句）
- ・等々

IV 物語理解の図式（モデル）

前章で見た物語理解の万物理論の要件から、理解図式（モデル）を抽出してみる。1つのモデル候補

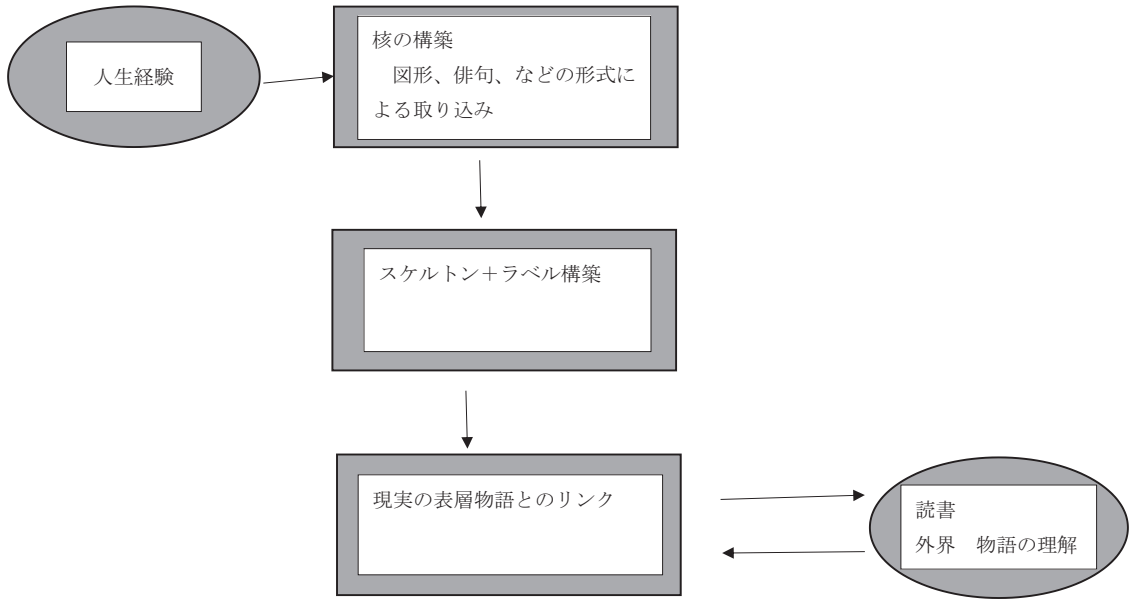


図1 物語理解の構造

は図1のようになるだろう。

V 物語理解の核の構築

物語理解の核には、図式、簡潔な文（標語、諺、キャッチコピー、などの文）など、個人的事情（つまり各人の認知力・知識力・感性・価値観など）によって、任意に設定できる。

本章においては、物語図式、伝統的物語論における定式化（構造図式）、俳句（簡潔な断片文）を取り上げる。

1 物語図式

Lehnert (1982) の物語理解図式を、まず取り上げる。この図式の基底にある考え方は、すべての物語は陽（良いこと）と陰（悪いこと）の相互反復、相殺によって構成される。つまり人生には、晴れの日もあれば雨の日もあるという考え方である。

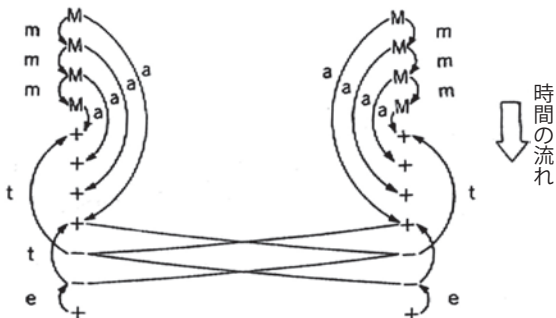
不思議なことに多くの物語はこのパターンに収まる。また多くの人々にとって陽（+）と陰（-）の切り替えという考え方は理解しやすい。「悪いことはそういつまでも続くわけではない」「うまい話には裏（悪い話）が潜んでいる」。欧米人がテーブル・トークで頻用するレトリック「Good News-Bad News」, 「人間（じんかん）万事塞翁が馬」という達観、などは、この範疇に収まる。

陽と陰の均衡は、諦観の一つの特徴として採用できるかもしれない。

次の「図2 Wendy G. Lehnert (1982) の物語理解図式の例解」は、筆者が昔（1986年6月）企業人教育用の教材として作成した図面に若干の加筆修正を加えたものである。今なお物語理解の考察に有効であるので本論文でも引用する。（cf. 文献 [27] 新田義彦、『自然言語処理（応用）』の p.119 図 10- 8）このような理解図式の試作と改良を今なお継続している。後続の論文で報告したい。

妻（ダラ）の立場からみた推移
 クリスマスの贈り物をしたいと思う
 贈り物を買いたいと思う
 お金がいると思う
 髪 / 懐中時計を売ろうと思う
 // を売る
 お金を手に入れる
 贈り物（鎖 / 櫛）を買う
 // (//) を相手にあげる
 // (//) を受けとる
 贈り物を見て悲しむ
 お互いの深い愛を知る

妻（ダラ）の立場からみた推移 夫（ジム）の立場からみた推移

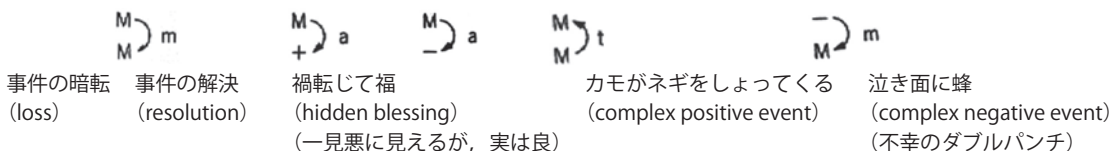


注1. ノードとリンクの記号の意味は下記のとおり。

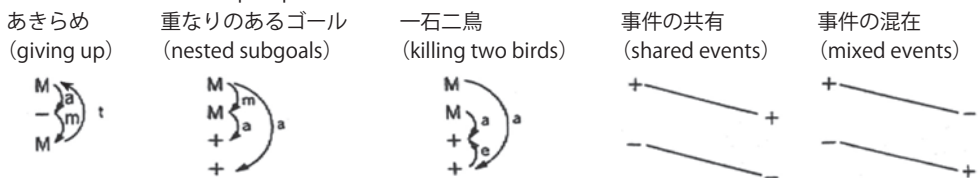
- M : 精神状態 (mental state)
- m : 動機づけ (motivation)
- t : 事件の終了 (termination)
- + : 良い事件 (positive event)
- a : 事件の誘起 (actualization)
- : 悪い事件 (negative event)
- e : 二つの事件の並列 / 事件の二局面 (equivalence)

注2. 物語の基本単位 (primitive plot unit) の例は下記のとおり。

動機づけ (motivation) 成功 (success) 失敗 (failure) 心変わり (change of mind) 課題に直面 (problem)



注3. 物語の複合単位 (complex plot unit) の例は下記のとおり。



注4. モデル化の対象は、Oヘンリーの短編「賢者の贈り物」である。そのあらすじは以下のとおり。

「ダラとジムという大変貧乏な夫婦が、クリスマスのためにお互いに贈り物をしたいと考えた。ダラはその美しい髪を売って、夫が愛用している懐中時計につける鎖を買った。一方、ジムは懐中時計を売って妻のために櫛を買った。お互いの行き違いを知った二人はしばらくの間悲嘆にくれたが、やがて、何物にも代えがたい深い愛の贈り物を互いに受け取ったのだと悟り、幸福な気持ちにひたつたのであった。」

注5. 上記の図は文献 Lehnert, W.G. : Plot Units : A Narrative Summarization Strategy, in : Lehnert, W.G. and Ringle, M.H. (eds.): Strategies for Natural Language Processing. Lawrence Erlbaum Associates. Publishers, Hillsdale, New Jersey, London, 1982, pp.375-412 の p.400 の図を翻訳し、いくつかの注を加えて見やすくしたものである。

図2 Wendy G. Lehnert (1982) の物語理解図式の例解

2 伝統的物語論における定式化

ウラジミール・プロップの「昔話の形態学」では、すべての民話は 31 個の機能（起こり得る行為、出来事）のうちのいくつかからできている、と主張している。この主張は 100 編の民話からなるコーパス分析に基づいている。（cf. 文献ピーター・バリ（著）、高橋和久（訳）（2014）の pp.270-274）

31 個の機能には、「家族の一員が家を留守にする」「主人公に禁止が宣告される」「禁止が破られる」「敵対者が偵察をする」「敵対者が犠牲者についての情報を得る」（以上 cf. ibid.）などが含まれる。

ロシアの昔話をコーパスとしているので、現代日本で生活する筆者のための「物語核（諦観）」の構築には使えない。しかしながら、有限個（比較的少ない個数）の機能ユニット（プロット単位）の集合で、多くの物語（人生経験の物語）が集約的に把握できるという主張は注目すべきと思う。諦観の構成ユニットは、個々人の枠を超えて比較的小規模な有限集合にまとめられるという予想が立てられるからである。

3 俳句または断片文

ここでは、洗練され陶冶された文としての俳句（あるいは簡潔な短文）を、核に据えてみよう。核としての俳句（あるいは簡潔な短文）と物語理解の例をいくつか示す。

1) 木枯らしやすぐに落ち着く水の月 加賀千代女

——木枯らしがさっと吹いて水面に映った月影が束の間乱れた。しかし、すぐにまた元の静冷な姿に戻った。水面の月は何もなかったかのような顔をしている。

人生における諦観と結びつけると面白い。人生行路では様々な事件や変動が発生し、我々の心と身体が揺さぶられることが多いが、あわてずに静かにしていると、時の流れが解決鎮静化してくれることもある。やや受け身の諦観であるから、積極的解決に向けて動くべき場合もあることを忘れてはならないと思う。

2) 武士道とは、死ぬことである。あれかこれか、生か死かの選択をせまられたときは、ただ死ねばよい。目的を遂げずに、生きのびたら、腰抜けである。目的も遂げずに死んだら、犬死に、間違い沙汰であるが、恥にはならない。…… つねに死に身になって、武士道に達し、一生の間落ち度もなく務めを果たすことができるのである。——山本常朝『葉隠れ』、現代日本語訳は、松本道弘氏および大宮司朗氏による（cf. 文献 [Yamamoto Tsunetomo 2005]）

解釈には慎重さが必要な短文である。筆者は「人生は目的を目指して必死に努力しなければならない。目的なく安穩に生きてはいけない。必死とは皮相通俗の拘りの生き様を捨て、透明超越の境地に入ることである」というように解釈している。「死ぬ」という語を前面（全面）に引き出した解釈は、危険な戦争肯定、死地に赴く兵士鼓舞の文言に結びつきかねないので避けるべきである。

3) 行く川の流は絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたる例（ためし）なし。世の中にある人と栖（すみか）と、またかくの如し。……そもそも、一期の月影傾（かたぶ）きて、余算の、山の端（は）に近し。忽ちに、三途の闇に向かはんとす。何の業をかかこたむとする。仏の教へ給ふ趣は、事に触れて、執心なかれとなり。今、草庵を愛するも、咎とす。閑寂（かんせき）に着するも、障りなるべし。いかが、要なき楽しみを述べて、あたら時を過ぎさん。しづかなる暁、この理（ことわり）を思ひ続けて、自ら、心に問ひて曰く、世を遁れて、山林に交はるは、心を修めて、道を行はむとなり。……

方丈記 鴨長明

脈々と未来永劫続行する時空上に分布する棲家とその住人、いずれも束の間の存在でありすぐに消滅する。この世の万物は有為無常。人々が事物環境に執着することを諷めている。己自身の隠遁生活への愛着をも厳しく自戒している。

京都の日野山に強靱かつ透徹した観照の精神をもって隠棲した鴨長明の随筆には、いたるところに人生を諦観するための示唆が織り込められている。方丈記の研究書や解説書も多く [cf. たとえば文献 [24] [25] [26]], 人生物語理解のための核文を抽出するのに事欠かない。

4) 一家（ひとつや）に遊女も寝たり萩と月 松尾芭蕉

人生すべて抹香臭い諦観ばかりではない、色彩感覚のある余生を楽しんでいる人もいるかもしれない。老人の目で若い作家の書いた恋愛小説を読むと、ときにこの句のような物語理解の核に辿り着く。

VI おわりに

物語理解の極限、つまり人生行路の到達点（終着点）に存在する「諦観」の姿の追究という、いつかはやっておかねばならぬテーマを念頭におき、万物理論の存在の可能性について考察した。

日本の伝統的文芸である俳句およびそれに準ずる短文が、万物理論の中核に据えられる核となり、「諦観」に接近するための拠点となり得ることは示せた（説得できた）かもしれない。

今後は認知科学、認識論、心理学などにおける諦観、悟りの境地の捉え方などを調べ万物理論の今少しの整備を図りたい。

謝辞

小生の古稀定年記念の紀要 No.81 に、体調不良を圧して御寄稿下さった、相沢輝昭先生、坂本 實先生、佐藤 創先生に感謝します。またご多忙な日々にも関わらず御寄稿くださった佐良木 昌先生、木下秀昭先生に感謝します。いちいちお名前を挙げませんが、ご投稿くださった日本大学経済学部の諸先生に感謝の意を表明します。原稿を執筆されたにもかかわらず事務的な事情により論文収録に至らなかった、小坂國継先生、安田 静先生に謝意を表明します。

小生自身も古稀定年に相応しい小文を意図して「諦観」を扱った駄文を載せました。原稿完成まで一方ならぬお世話になった編集委員会および研究所事務課の皆様には深甚なる謝意を表明します。

参考文献

- [1] ジャン＝ミシェル・アダン（著）末松壽、佐藤正年（訳）、『物語論——プロップからエーコまで』、文庫クセジュ 873、白水社（2004）。
- [2] Genette, G., *Discourse du receipt, essai de méthode, Figures III*. Paris: Seuil. [訳本：ジェラルール・ジュネット（著）花輪光、和泉涼一 訳、『物語のディスクール：方法論の試み』、水声社（1985）]。
- [3] 小方孝、金井明人、『物語論の情報学説——物語生成の思想と技術を巡って』、学文社（2010-10）。
- [4] 新田義彦、「物語と非物語の差異に関する雑感」、人工知能学会・第49回ことば工学研究会資料、於 岩手県盛岡市プラザおでって（2015-9-26）pp.65-74。
- [5] 新田義彦、「非物語から物語を引き出すこと」、人工知能学会・第50回ことば工学研究会資料、於 千葉大学・人文社会学系総合研究棟（2015-9-26）pp.117-123。
- [6] 新田義彦、「謎解きによる物語性の抽出について」、電子情報通信学会・総合大会於九州大学・予稿集、D-5（2016-3-15～19）。
- [7] 新田義彦、「抽象的概念の理解に役立つ物語性について」、情報処理学会第78回全国大会論文集6 B 06 慶応大学矢上キャンパス（2016-3-10（木）～12（土））。
- [8] 新田義彦、「オントロジー知識を基礎とする質問応答システムの検討」(A Study of Question-Answer Systems Based on Ontology Knowledge)『経済集志』、Vol.73 No.3 日本大学経済学部（2003-10）pp.29-88。
- [9] 山本常朝 [英訳 William Scott Wilson, 現代日本語訳 松本道弘、大宮司朗]『対訳葉隠れ (Yamamoto Tsunetomo, Hagakure, The Book of Samurai)』, Kodansha International, Tokyo, New York, London (2005) 301P [原典：山本常朝, 『葉隠れ (葉可久礼)』肥前国鍋島藩 (1716 頃)]。
- [10] ジョナサン・カラー（著）荒木映子、富山太佳夫（訳）『文学理論』岩波書店（2003）
[原著：Culler, Jonathan, *Literary Theory, A Very Short Introduction*, Oxford University Press (1997)]。
- [11] ピーター・バリヤー（著）、高橋和久（訳）、『文学理論講義』、ミネルヴァ書房（2014）[原著：*BEGINNING THEORY: An Introduction to Literary and Cultural Theory, 3rd ed.*, Manchester University Press (2009)]。
- [12] 新田義彦、「遍在する物語性について」、第20回 言語・認識・表現研究会（LACE20）於 千代田区役所図書館 第1第2研修室（2015-11-28（土））。
- [13] 新田義彦、「物語性の効用について」、電子情報通信学会 思考と言語（TL）研究会、研究報告 Vol.115, No.441, T12015-56, 2016-1-29（金）～30（土）明治大学駿河台アカデミックモン。
- [14] 新田義彦、「物語性について (Essay on Narrativity)」、『経済集志』、Vol.85, No.4（2016）pp.1-9。
- [15] 新田義彦、「物語構造の動的観想 (A Dynamic View of Narrative Structure)」、『経済学部・産業経営研究』、No.38（2016-4）pp.1-11
- [16] 新田義彦、「物語性の可用性について (On Applicability of Narrativity)」、『経済学部研究紀要』、No.80（2016-4）pp.1-17
- [17] J. D. バロー（著）林 一（訳）『万物理論——究極の説明を求めて』みすず書房（1999）

- [原著：Barrow, John D., *Theories of Everything---The Quest for Ultimate Explanation*, Oxford University Press (1990)].
- [18] Lehnert, W. G. (1982), Plot Units: A Narrative Summarization Strategy, in: Lehnert W. G. and Ringle MN. H. (eds.): *Strategy for Natural Language Processing*, Lawrence Erlbaum Assoc. (1982).
- [19] Mac Lane, Saunders, *Categories for Working Mathematician*, Springer-Verlag, New York LLC. (March 27, 1997) [訳本：S. マクレーン 著, 三好博之, 高木 理 訳, 『圏論の基礎』, 丸善出版 (2012-3)].
- [20] Freyd, P., *Abelian categories, An introduction to the theory of functors*, New York: Harper and Row (1964).
- [21] 清水義夫, 『圏論による論理学——高階論理とトポス』, 東京大学出版会 (2007).
- [22] 清水義夫, 『記号論理学講義——基礎理論, 束論と圏論, 知識論』, 東京大学出版会 (2013).
- [23] S. シュトラッサー (著) 徳永恂, 加藤精司 (訳), 『人間科学の理念——現象学と経験科学の対話』, 新曜社 (1978) [原著：Stephan Strasser, *Phänomenologie und Erfahrungswissenschaft vom Menschen, Grundgedanken zu einem neuen Ideal der Wissenschaftlichkeit*, Walter de Gruyter, (1962)].
- [24] 安良岡康作, 『方丈記 全訳注』, 講談社学術文庫 459, 講談社 (1980).
- [25] 築瀬一雄, 『方丈記全訳注』, 日本古典叢書, 角川書店 (1971).
- [26] 瓜生等勝, 『方丈記——複製校異 松平文庫本』, 教育出版センター (1971).
- [27] 新田義彦, 『自然言語処理 (基礎) 及び同 (応用)』, in: 人工知能基礎コース (第1版), 第9章及び第10章, (社) 日本能率協会, テレラーニングスクール (1986-6) pp.91-124.
- [28] S. ワインバーグ (著) 小尾信弥, 加藤正昭 (訳), 『究極理論への夢——自然界の最終法則を求めて』, ダイヤモンド社 (1994) [原著：Steven Weinberg, *Dreams of Final Theory*, Pantheon Books, New York, U.S.A. (1992)].
- [29] 新田義彦, 「物語理解のための万物理論の可能性 (An Essay on a Plausible Universal Theory for Narrative Comprehension)」, 『経済学部研究紀要』, No.81 (2016-7) pp.1-12
注意：これは本論文であるが、書誌的理由で自己参照した。
- [30] 新田義彦, 「万物理論として見た物語理論」, 2016年度 ALR (言語研究アソシエーション) シンポジウム, 於 千代田区立図書館会議室, 2016-8-25 (Thur)
- [31] 新田義彦, 「物語生成理論の持つ万物理論的側面 (Universal Theoretic Aspects in Narratology)」, 認知科学会の人工作者オーガナイズドセッション, 日本認知科学会 於 北海道大学, 2016-9-16 (Fri)
- [32] 新田義彦, 「人生物語の破壊 (やり直し) が可能となれば」, 人工知能学会・第52回ことば工学研究会 於 千葉大学 2016Oct8 (Sat)